

平成26年度第1回 知床世界自然遺産地域  
適正利用・エコツーリズム検討会議  
議事要旨（案）

日時：平成26年7月14日 13：30～15：30  
場所：羅臼町公民館大集会室

会 議 次 第

開会

あいさつ

議事

1. 実施部会からの報告
  - (1) 知床ヒグマ餌やり禁止キャンペーン
2. 検討部会からの報告
  - (1) 知床五湖冬期利用促進事業検討部会
  - (2) 知床ロングトレイル・プロジェクト部会
  - (3) 赤岩地区昆布ツアー部会
3. 個別部会等からの報告
  - (1) 知床五湖地区における取組
  - (2) カムイワッカ地区における取組
  - (3) ウトロ海域における取組
4. 将来課題に関する意見交換
  - (1) 野生生物の観光利用のあり方について
5. その他（情報共有）
  - (1) 周年記念事業の概要について
  - (2) 周年記念シンポジウム及び関連企画について
  - (3) 地域自然資産法について

閉会

## ◇議事要旨

### 【 開会 】

### 【 あいさつ 】

(釧路自然環境事務所 中島)

平成26年度第1回知床世界自然遺産地域適正利用・エコツーリズム検討会議、お集まりいただき感謝。新聞でご覧になった方もいると思うが、7月3日、4日に北川環境副大臣と井上環境副大臣が知床を視察した。視察の感想として、地元との協力関係が進んでいる知床の保護管理は素晴らしいと述べられていた。この会議は、まさにそういった協力した取り組みを実践していく場と考えている。本日は課題が盛りだくさんであり、難しい課題も多いが、忌憚ないご意見をいただきたい。

(釧路自然環境事務所 高瀬)

前年度の第2回会議で検討委員の再編があった。それにより、今年から委員は4名となり、本日欠席の中川委員を除く3名に出席頂いている。また、今回の議題である「野生生物の観光利用のあり方」に関連し、専門委員として間野委員に出席いただいた。

(座長)

お忙しい中お集まりいただき、御礼申し上げます。3月26日に開催した前回会議より4カ月余りがたった。前回提案された案件や、継続して審議をしている案件についても、休みなく調査・検討に尽力頂き感謝申し上げます。本日は重要な議題が多数あるが、真剣にお話しいただきたい。

議事については、これまでのルール通り、立場に関わらず発言は自由である。この会議の参加者は、エコツーリズム検討会議の専門家、地域関係者、関係行政機関の方など普段の仕事の性質や考えの違う人たちの集まりである。それは合意形成や議論の障害ではないと考える。違えば違うほどダイナミックな答えが出せるという、この会議ならではの特性を活かして、よりよい解決策や提案に結び付けてもらいたい。

今回の検討部会からの報告は重要な案件を含んでいる。検討部会で検討された結果を審議する、ということを理解していただきたい。

進行の順番としては、①すでに実施した実施部会からの報告②検討を進めている検討部会からの報告③エコツーリズム戦略以前からの個別部会等からの報告をそれぞれ行い、その後、将来課題や情報共有などについて議論したい。

では早速、知床ヒグマえさやり禁止キャンペーンから報告をいただきたい。

## 1. 実施部会からの報告

### (1) 知床ヒグマ餌やり禁止キャンペーン

(知床斜里町観光協会 新村)

資料1-1、説明。

今年度は、大きく3点の計画をしている。①啓発グッズの作成—今年から外国人観光客への周知強化のため、英語、中国語のパンフレットを作成した。②啓発活動—会議等での啓発を実施。7・8月は強化月間として、宿泊施設の協力で啓発強化を実施するとともに、知床自然センターでの特別展も行う。③観光関係者への協力依頼—知床到着前の周知強化を目標として札幌地区の観光関係業界や交通事業者へ協力を要請した。これ以外にも引き続き、実施・検討していきたい。

(座長)

この件についてご意見、ご質問があれば承る。知床ヒグマえさやり禁止キャンペーンは評価も高く、周知が徹底してきている事業である。今後も継続して進めていただくとともに、関係の皆様には、今後も協力をお願いしたい。

## 2. 検討部会からの報告

### (1) 知床五湖冬期利用促進事業検討部会

(座長)

次に、3つの検討部会から報告を頂きたい。まずは、継続審議となっている知床五湖冬期利用促進事業検討部会から検討結果の報告をお願いする。

(斜里町 河井)

前回の検討会議で指摘を受けた4つの事項について、検討部会を2回開催し、改善案を検討してきた。下記、5点について提案を見直し、改善を図った。

- ①事業趣旨の見直し。
- ②利用形態の見直し。ガイド付き利用のみに変更。
- ③年度ごとの計画人数の明確化。
- ④③に基づく収支計画。
- ⑤安全対策の見直し。

全体として、提案がエコツアー戦略の考え方から逸脱していないかを再確認した。夏の知床五湖における利用調整地区制度との整合性を意識し、ヒグマ活動期の地上遊歩道利用のように、当面はガイド利用のみに限定してスタートする。自然環境への影響の有無や現地での安全対策などを確認しながら進めていきたい。さらに、道道知床公園線の道路管理者と協議し、道道の閉鎖区間の除雪を要請したところ、前向きに検討したいという回答を得たところである。しかし、現在調整中の事項であり、現段階では受益者が除雪費用を負担

する計画となっている。今後協議会を設立し、さらに詳細な検討を重ねて行きたい。

(知床斜里町観光協会 代田)

PPT で説明。本部会の事業内容について、冬の知床五湖に行ったことがない委員の方も多。そこで、写真でこの事業のイメージを伝えたい。これまでの徒歩利用の際の写真を紹介する。先ほど河合課長からも説明があったように、ガイド車両のみで五湖駐車場までアクセスするという構想である。アクセスは基本的に道道知床公園線の岩尾別ゲートを起点として、道道と町道知床五湖道路を通り、五湖駐車場に向かう。五湖駐車場で下車し、スノーシューまたはスキーで五湖園地に向かうというのが基本的な考え方。

(写真説明) 夏の知床五湖と冬の知床五湖。スノーシューやスキーのガイドツアーの様子。冬の原生林の散策。羅臼岳とエゾシカなど。

次に、事業内容について説明する。資料 2-1 ①～⑤を説明。

まず、事業名を「厳冬期の知床五湖エコツアー事業」とした。内容の詳細については、資料のとおりである。

(座長)

この件に関して、質問、意見、コメント等はあるか。

(愛甲委員)

目標に記載されたように、冬期間の体験プログラムの提案により、利用の幅が広がることは非常に良いことだと感じる。2点質問がある。1点目は、予定しているモニタリングの内容はどのようなものか、また2点目は、現時点での歩く経路はどのように想定しているのか教えてほしい。

(知床斜里町観光協会 松田)

歩くコースについては、従来の利用に準じる。ただし、このルートは夏とは異なる。積雪の関係で、木の枝等が邪魔になることがあり、開けた場所や湖岸沿いを利用することとなる。

(知床斜里町観光協会 代田)

ガイド車両でのアクセスによる冬の五湖散策は初めての試みであり、モニタリングは必要と考えている。基本は遊歩道に沿った利用を原則とするが、ショートカットすることでも一部遊歩道を外れることもある。この点で、植生への影響をモニタリングする必要があると考えている。また、午前、午後それぞれのピークに最大 75 名ほどの利用が想定される。その際に静寂性がどの程度確保できるのか検証する必要がある。また、冬季なので暴風雪、

安全の確保、中止の回数等、安全対策の面でモニタリングを行っていく予定である。

(愛甲委員)

今の話の中で、遊歩道への影響に関しては、基本的に積雪上であることから植生への影響は軽微と考えられる。

静寂性の観点は重要であり、参加者の満足度についてのモニタリングを実施してほしい。グループあたりの定員が10名で、1日で最大150人の利用があることになる。現在の利用調整地区制度によるヒグマ活動期の運用においては、グループごとの間隔を空けるなどの工夫が満足度を上げている。いろいろと試行してほしい。

(知床財団 寺山)

2点教えていただきたい。1点目は、道道の除雪を道路管理者が担うこととなった場合、収支予算が具体的にどのように変化するか。2点目は、この企画を利用者にどのようにプロモーションするのか。一般の方に企画を伝える戦略が必要であると部会でも発言したが、これに関して、何か作業が進んでいるか教えていただきたい。

(知床斜里町観光協会 代田)

除雪の関係については、北海道が道道の除雪について積極的に協力しようという話が出ている。併せて町道についても除雪をお願いしなければならない状況である。これに関する収支についてであるが、道道と町道の除雪を担ってもらったとしても、駐車場の除雪と、排雪は行わなければならない。現段階の除雪費用の試算はトータルで430万円となっているが、このうちの100万円前後は排雪費用である。もし、道道の除雪費用が不要となれば、この排雪分の費用で収まる。

プロモーション戦略については、この事業に団体ツアーの利用者を呼ぶのは難しいと考えている。しかしながら、エージェンต์に対しても冬の五湖の宣伝は必要。短期的には、夏のツアーに参加したガイド事業者の顧客がリピーターとなって冬も来てもらえるようなプロモーションをしていくことが一番大事だと考えている。その間に協議会を設立し、長期的なプロモーションをどうしていくのか検討していきたい。

(知床財団 寺山)

道道が除雪されることに関して、費用負担が軽くなるのはよいことである。しかし、道道の冬季全面開放が部会の目的ではないということは、検討部会の場でも確認した。あくまで限定的なガイド付きツアーの利用が前提であり、事業者自らが除雪のコストをかけてでも知床の価値を高めるために実施する企画であると理解している。もし、この事業が、道道の冬期閉鎖区間の一般解放につながるということであれば、それはまったく別の話であるということを確認したい。

もう一つは、費用負担が 300 万円ほど軽くなることにより、事業主体によるプロモーション等の詰めが甘くなつてはいけないと考える。エコツアーとして、ルールに基づく限定的な利用という点を前面に出すべき。エコツアーを通じて知床の価値を高めていくか観点から今後も協力したい。

(座長)

道道の冬季閉鎖区間の一般供用へ事業を拡大しない、という点の確認であった。もし一般利用に拡大した場合は、その場で事業が中止となることを承諾していただきたい。

プロモーションの強化については座長から一点付記したい。利益の還元は戦略の持っている一つのお願事項、つまり特性である。除雪費用等の負担が軽くなり利益が出た場合、事業者で分配し利益としたり、減価償却等に回したりすることも必要であるが、地域の自然や社会に還元する仕組みを組み込むことは、戦略の持っている一つの精神である。よって、還元部分を拡大するようにぜひお願いしたい。そのように還元することで、ブランド価値の向上につながる。以上について回答をお願いしたい。

(知床斜里町観光協会 代田)

除雪について、オホーツク総合振興局と協議をしてきた経過では、今のところ一般供用する考え方はまったくない。除雪についても、最低限のガイド車両が出入りできる除雪を現段階では想定している。自主除雪であろうが、北海道による除雪だろうが、この事業の目的のみに限定する考えである。

利益の還元については、部会でも議論してきた。寄付行為については、現段階でいくらは明言できないが、斜里町の 100 m<sup>2</sup>運動への寄付を含め還元が必要という認識である。

(知床財団 寺山)

これからのところもあるが、収支が厳しくとも、地域のために実施すべき事業だという認識でいる。除雪によって支出に変更があっても、利益を寄付することにより、付加価値を高めるツアーである、という打ち出しが必要だろう。収支がプラスでもマイナスでもきちんと寄付をする主旨のツアーであるというプロモーションを行うべきである。

(間野委員)

エゾシカ・陸上生態系ワーキンググループでは、3月の知床半島における様々な野外活動が、猛禽類の繁殖に与える影響について議論している。杞憂かと思うが、このツアーによる活動は、生態系への影響には十分に配慮しているという理解でよいか。

(知床斜里町観光協会 代田)

中川委員には部会にも参加していただき、アドバイスをもらっている。海岸を歩くこと

は避けること、また多少歩道から外れる程度では問題ない、というご意見であった。

(座長)

「厳冬期の知床五湖エコツアー」事業について実施を承認してよいか。

(一同)

承認。

(座長)

承認となった。提案の通り進めて頂きたい。ツアーが実現した際には、この会議の参加者にも参加を呼び掛けてほしい。

## **(2) 知床ロングトレイル・プロジェクト部会**

(座長)

2番目の話題、知床ロングトレイル・プロジェクトの説明をお願いします。

(知床ガイド協議会 岡崎)

知床ロングトレイル・プロジェクトについて、資料2-2に基づいて説明。

本事業は、知床ガイド協議会前会長の山本が中心となって申請し、検討を進めていた。山本の死去に伴い、事業の継続について知床ガイド協議会として再度協議・検討を行った。その結果、現行の体制では、人的にも時間的にも継続が困難という結論となった。そのため、一旦申請を取り下げたいと考えている。ロングトレイルが知床にとって必要という認識に変わりはなく、将来、体制を立て直した上で再度申請したい。知床財団によるホロベツ構想等も参考とし、知床でのロングトレイルをガイド協議会として再度提案したい。このような結論となったことに対して、これまでご協力頂いてきた委員の皆様、部会の皆様に、心よりお詫び申し上げたい。

(座長)

この件に関し意見、質問等あるか。特に無いようであれば、取り下げを認めるということでよいか。

(一同)

取り下げを認める。

(座長)

この知床ロングトレイル・プロジェクトは大変面白い提案であり、大勢の共感も得られた企画であった。山本前ガイド協議会会長の思い入れがあった企画であり大変残念であるが、取り下げを決定する。

(知床財団 寺山)

ロングトレイルは議論の中でいろいろな可能性が検討され、私たちの参考になった。今回の取り下げは残念であるが、このロングトレイルという考え方が知床にとって重要であるということは認識している。今すぐに引き継いで提案とはならないが、今後知床財団でも検討を進め提案につなげていきたい。

ここに知床半島の地図がある。知床自然センターを起点とし岩尾別を経て、岩尾別温泉から羅臼岳、知床連山、硫黄山に至る。東岳から羅臼側のルサに至る旧道を復活することができればルサフィールドハウスに下りることができる。相泊から知床岬までは既にトレッキングルートとして確立しており、これを繋ぐことで知床グランドトレイルともいえるロングトレイルも構想可能である。まだ具体的に提案できる段階ではないが、知床全体の価値を上げる提案として検討したい。10年後には今とは旅行形態も変わり、外国人も増えると予想される。もしこのような構想が知床で実現できれば、ネパールのトレッキングルートと同じように1週間かけて知床を海から山を経由して知床岬まで歩くという遠大な構想となる。現時点では妄想であるが、いつの日かこの提案を皆様に還元できるように知床財団としても努力していきたい。

(座長)

今日明日の話ではないが、知床財団の構想するスーパーロングトレイルの計画であった。知床財団がこのような形で引き継ぐことに、岡崎会長から意見はあるか。

(知床ガイド協議会 岡崎)

大変心強い意見をいただき、ありがたく思っている。知床ガイド協議会として協力できることは協力したい。知床にはこのようなトレイルが必要だ。再度検討し、提案できるように努力したい。

(座長)

よい提案であると座長としても考えている。スーパーロングトレイル・プロジェクトの提案を、近い将来に期待している。指摘のとおり、10年後は観光利用の内容や社会状況は大きく変化する。知床には長期的な視点が必要だ。知床財団にも進めてもらいたい。

### (3) 赤岩地区昆布ツアー一部会

(座長)

3 番目の議題へ移る。赤岩地区昆布ツアー部会からの提案。前回の検討会議において説明されたが、共感が大きかった。しかし従来、先端部地区は秘境感がある場所ということで、関係者が特別な経緯と認識を持ってきた場所である。このツアーについては今までの原生自然体験ツアーとは性質が異なり、エコツーリズム戦略の 8 ページに記載された「文化的資産等の活用」、つまり漁業者が自然開発を行ってきた歴史性に基づいたツアーである。新しいメニューということで認識や共有が難しいが、エコツーリズム戦略にもある、先人の漁業や昆布漁の文化的な遺産を積極的に活用するという趣旨に沿っている。これについて、承認の可否を問いたい。それでは、提案者から説明して頂きたい。

(羅臼町 田澤)

資料 2-3 ①説明。受付者の羅臼町から、部会の経緯を説明したい。

赤岩地区昆布ツアー部会へと部会名を変更した。部会は 2 回開催している。部会での議論では、大枠としてこのツアーを進めたほうが良いという意見でまとまった。

ただし、いくつかクリアすべき課題も出されている。船舶の運航に関しての法的な条件、国有林との兼ね合い、自然公園法上の条件については、それぞれ問題がないことを確認済みである。その上で、「知床岬地区の利用規制指導に関する申し合わせ」（以下「申し合わせ」）と「知床半島先端部地区利用の心得」（以下「心得」）との整合性を図る観点から議論を行った。「申し合わせ」に関しては、利用区分の中でレクリエーション目的での動力船での岬地区への上陸は認めないとしているが、教育目的の利用については、除外としている。部会としては、今回のツアーは教育目的での立ち入りであるという整理をしている。ただし、「申し合わせ」に名前を連ねている網走海上保安署とウトロ漁業協同組合については、部会のメンバーではないため、別途合意が必要である。このうち網走海上保安署については、すでに合意済みであり、ウトロ漁業協同組合からは返答待ちの状況である。

「心得」については、部会の前に行政機関等から変更案のたたき台を提示したかったが、変更のボリューム等について多くの異なる意見が出たため、部会で案を出すには至らなかった。今後検討を進める中で、変更案を作成してはどうかとの意見が出ている。一般参加のモニターツアーの実施は、この検討会議で承認された後となるが、関係機関による現地調査については、すでに 1 回実施した。部会の経過については、以上である。

(知床羅臼町観光協会 池上)

資料 2-3 ②③を説明。ツアーの目的は、知床岬の先端部赤岩地区で行われている昔ながらの昆布漁に触れ、知床半島先端部において自然と共生しながら漁業を営んできた歴史・文化を学ぶ機会をエコツアーとして提供することである。

内容等については資料にある通りだが、今年 1 年で検討を行うことを当初考えていた。しかし気象状況も厳しく、少ない催行回数の中で、1 年のみではこうあるべきといった検討

が行えないと考え、非営利のモニターツアーを2年もしくは3年間実施し、検討を行いたいと考えている。

このツアーの目的はエコツーリズム戦略にある「文化的遺産等の活用」に当たる。原生の自然の魅力が知床にあることは別の機会で伝えることが可能である。このツアーでは、自然の中で古くから営まれてきた漁業という文化の歴史とその変遷を伝えたい。

(座長)

この提案に関して追加して補足する。本日の会議に先行して7月11日に知床世界自然遺産地域科学委員会が開催された。その場で本検討会議の検討状況この検討会議の検討結果を報告した。当然ながら報告には赤岩地区昆布ツアーに関する検討内容も含まれるが、これに対して科学委員会の委員よりコメントが多く寄せられた。また、会議終了後のメール上でも多くのコメントが発信されている。本検討会議は決定の場であり、科学委員会は科学的なアドバイスを行う場である。科学委員会からのたくさんの意見やアドバイスを汲むため、追加資料と口頭で委員からの意見を紹介する。本日は、こうした意見があることを前提に議論していただきたい。科学委員会席上での意見は、本日はまだ議事録がない段階であるので、座長である私から口頭で紹介をさせていただく。

<科学委員会での意見>

山中委員：先端部については、これまでバックカントリーとして扱われてきた。ここでの動力船によるツアーについては注意が必要である。ツアーが拡大していった場合、人数の歯止めがかけられるのか、また、保全の立場で発言をする委員が少なく、十分なチェック機能が働いていないのではないかと、といったことを危惧する。適正利用・エコツーリズム検討会議のメンバーにしていただきたい。

松田委員：このツアーは、レジャーでなく教育目的だという説明を初めて聞いた。教育ということであれば、教育の専門家を検討メンバーに入れる必要があるのではないだろうか。

中川委員：「申し合わせ」を教育目的で解釈するということには、無理がある。教育なのか観光なのかを明確にするべきである。活動場所についての質問もあり。

桜井委員：山中委員に検討会議のメンバーに入ってもらいたい。教育の専門家の参加が必要である。

メールリストでの発言は科学委員会のメンバーに配信されている。今回は時間の関係もあり、このメールをそのまま資料として配布している。そのため、取扱いに注意していただき終了後に回収する。

今回の提案について、質問・意見をお願いしたい。

(間野委員)

資料 2-3②概略版の目的について、これまで知床で行われてきた様々なプログラムの中で、地域の歴史・文化を念頭に置いたプログラムを提案されたことについて、非常に感銘を受けた。この羅臼の昆布漁の歴史・文化を学ぶことが、どのように世界自然遺産としての知床の価値を高めることになるのか。

(知床羅臼町観光協会 池上)

まず、羅臼町の基幹産業は漁業であり、漁業従事者の中でも一番数が多いのが昆布漁師である。つまり、昆布漁は羅臼町のアイデンティティと考えることができる。また世界自然遺産地域の核心部で、大正 6 年から厳しい自然の中で漁業が営まれていたという事実がある。この機会に伝えて行かなければ、この地域で昆布漁を行った経験のある人がいなくなり、この文化が伝承されないのではという危惧がある。

また、和食が世界遺産に認定されたが、その根幹とされるだし、うまみの文化としての羅臼昆布の価値も伝えて行きたい。

(間野委員)

知床というと原生自然の価値ばかりが注目される。その中であって、長きにわたる人間の生産の営みの歴史があり、そうした生業が、世界遺産に登録されるほどの素晴らしい自然と共生しながら行われてきたことをきちんと伝えるべきである。自然に全く手を加えないという保全・保護ではなく、自然の中で生活し、生態系の中で暮らしていくことを実践してきた歴史がある。厳しい自然環境にも負けない生活の知恵と、それを羅臼の漁業者が実践してきたという事実があるからこそ、現在の文化があるということを提案すると、歴史性の持っている価値が主張できる。すべての町には歴史があるが、羅臼ならではの立ち位置の打ち出し方を、目的の部分で分かりやすく述べるべきである。

(愛甲委員)

モニタリングの件について質問がある。モニターツアー実施後の順応的管理ということで、植生モニタリングや満足度調査などの記載があるが、具体的にはどういった内容を考えているか。

(知床羅臼町観光協会 池上)

モニターツアーを実施し、その中でアンケート調査を実施したい。詳細は資料 2-3③の 5 ページにあるが、このエコツアーに参加することで、羅臼という地域や環境保全に関する理解が深まったのか、そしてそれが産業振興につながったのかをモニタリングしたい。

(愛甲委員)

先ほどの科学委員会で出されたという意見等も踏まえて、意見を述べさせていただく。今の回答で具体的な説明はなかったが、植生モニタリングについては、今回のツアーが利用する範囲や滞在時間を考えると大きな影響があるとは思わないが、きちんとやる必要がある。

「心得」では、秘境感がある場所として位置付けられてきた場所でのツアー実施となる。そのため、アンケートは今回のエコツアーの参加者に対してだけではなく、羅臼側の海岸を歩いて利用する徒歩利用者なども含めて実施し、このようなツアーを実施する影響についてもう少し広くとらえてモニタリングするべきだと考える。

(知床羅臼町観光協会 池上)

そのようにしたい。

(知床森林センター 上野)

この赤岩の箇所は、エゾシカの影響を把握するための植生の調査プロットが設置されている。そのプロットの調査は数年に 1 回実施している。その際に、ある程度専門的な知識も含めて、協力は可能と考えている。今後も専門家のアドバイスも受けながら進めたい。

(釧路自然環境事務所 中島)

先端部地区の利用全体のモニタリングは、一事業者ではなかなか大変と考える。環境省としても何らかの協力をしたい。できるだけ委員の皆様や関係者と協力しながら、進めて行きたい。

(座長)

愛甲委員の専門分野であるので、お手伝いいただけるだろう。

(小林委員)

大事な論点が抜けている。今回のツアーの目的は文化遺産の紹介である。知床の世界自然遺産の土台の中で、矛盾しない形で文化遺産を紹介する。その中の突破口は教育目的という話であるが、モニタリングの中に教育効果のフィードバックが全く出てこない。何を教育して、それによってどのような効果があったのかについてのフィードバックがないと、目的の検証にならない。ぜひこれを入れるべきである。前提として、世界自然遺産の保全を損なわないためのモニタリングと、羅臼の歴史文化遺産の教育をどのように効果的にしているのか、この二つの点を、モニタリングの中に入れるべきである。それでなければ、今回このツアーで狙いとしている教育目的の特例という部分の評価ができない。

(知床羅臼町観光協会 池上)

そのとおりであり、取り組んでいきたい。協力をいただきたい。

(座長)

今話題にしている知床の文化は、自然との付き合いの中で生み出された貴重な文化である。生物多様性と文化の多様性を同時に考慮するツアーである。

(知床自然保護協会 綾野)

知床岬先端部赤岩地区で行われている昔ながらの昆布漁とあるが、赤岩地区は特別な形での昆布漁を行っていて、羅臼の他の地区はまったく違う形の昆布漁を行っているということか。

(知床羅臼町観光協会 池上)

大きな違いは、浜のなしかたにある。重機などの機械を入れることができないので、今でも浜ならしを人の手で行っている。昆布を採取する行程については、赤岩と他の地区で変わらないが、昆布を干す行程が大きく異なる。現在はほとんどの地区が乾燥機を使っているが、赤岩地区は日照時間が長いことから、天日干しを行っている。それらを含めて、昔ながらの昆布漁を行っているということである。

(知床自然保護協会 綾野)

そのあたりがわかりにくい。それだけ文化的価値があるものを紹介するなら、赤岩地区にこだわらず、天日干しを行っているもっと手前の場所でもできるのではないか。相泊から歩いて行ける場所なら、実施上の障害も少なく、今すぐにでもできるのではないかと考える。そのような場所でまず始めてみて、その反応を見た上で、赤岩地区への拡大を検討すべきと考える。今まで昆布漁を体験するというツアーは、聞いたことがなかった。これだけの価値があるのなら、なぜもっと身近な場所で行われてこなかったのかと疑問に思った。

船を使うツアーは中止の確率がかなり高い。そういった意味でも、赤岩地区以外で昔ながらの昆布漁を行っている場所があるのなら、そこを紹介することが重要なのではないか。赤岩地区以外には全く可能性がないのか。

(知床羅臼町観光協会 池上)

今までツアーになっていなかった理由は、それほど注目されていなかったということに尽きるかと思う。つまり、地域住民にとって昆布漁はあたりまえの姿であるので、資源化されていなかった。

なぜ赤岩でなければならぬのかということだが、同じ羅臼町でも、ペキンの鼻というところを越えると全く天気が変わる。乾燥機が普及していなかった時代に、漁業者はなぜ

赤岩に行ったかという、羅臼側では天日だけでは乾かしきれない昆布でも、赤岩では乾かすことができた。もっと手前の場所でもツアーができるのではないかとのことだが、そういう歴史があったことを伝えるために、実際に船で行くことで、赤岩地区の気象状況も含めて体感してもらいたい。

船で行かない方がリスクの軽減ができるのではとのことだが、今回のモニターツアーを通して、実際にどのくらい催行できるのかなど、船のリスクなども併せて検証して行きたい。

(座長)

ツアーを実施する場所は羅臼であるが、知床全体の問題を含んでいるので、多くの関係者にご意見いただきたい。

(愛甲委員)

ツアーそのものからは話が外れるが、制度的な課題の部分で、「申し合わせ」および「心得」との整合性についての整理がされているが、資料を読む限り、正直少し苦しいと感じる。

これは、このツアー内容の問題というよりも、「申し合わせ」や「心得」が想定していなかった利用形態の提案だということに起因していると思われる。環境省や関係機関へのお願いだ、この機会に、岬地区の現状をもう少し広く捉えて「申し合わせ」や「心得」について再考することを検討できないか。

(羅臼町 田澤)

科学委員会などでも批判的な意見が多かった。その半分以上は、「申し合わせ」と「心得」との整合性がとれないという意見であった。もともとの戦略の精神は、既存の法律や制度等のルールと提案に整合性がなくても、良い提案であればルールの側を変えるという考え方であったはずである。最初にルールに合っていないのでオフリミットであるというのは、全く逆である。ここでまず議論しなければならないのは、このツアーが本当に知床にとって有意義かどうか第一であって、制度との整合性は二の次だという認識であるが、違うか。

(座長)

エコツアー戦略が必要になったのは、既存の枠組み自体が現状に合っていない、窮屈であるという問題があったからである。現場で実際に運営し生活している関係者が望ましいということを計画でき、その内容が妥当であれば、制度そのものを改善して行こうという趣旨で作られている。それゆえ、まずは提案することの妥当性や提案内容の精査が重要となる。

今回の提案について、制度の方を合わせる事が可能かという点について、環境省や林野庁から意見等ないか。

(釧路自然環境事務所 中島)

「申し合わせ」は環境省だけで策定したものではないため、関係機関及び各位の意見を代表することは難しい。しかし、例えば、その精神を生かしながら、より幅広い関係者を加える等、現状にマッチした形にしていけるのであれば、将来的に見直していくこともありうると思う。

(知床財団 寺山)

「申し合わせ」については見直しもありうるという意見であったが、「心得」も改定の対象と考えてよいか。

(座長)

「心得」も、全体の中での位置づけなどから考えて、当然改定の対象となりうると思うが、この理解でいいか。

(釧路自然環境事務所 中島)

よいと思う。

(間野委員)

エコツーリズム戦略の主旨は、より良い形で多くの方が参画して、かつ受け入れられていくように、規則等を見直して行くことである。だからこそ新しい提案が出されたときには、きちんと戦略の原則を踏まえたうえで、検討すべき課題について問題提起することが、今後の適正利用の大きな原動力になると考える。

その上でもうひとつ、将来のあり方についてお聞きしたい。このツアーにおいて、昆布番屋での活動紹介を通して歴史の理解を深めることができたとする。また経済的な利益が地域に還元され、持続性が担保されたとする。そうなった際に、どのように世界遺産の保全なり発展にその利益を還元するのか、そのあたりの戦略が検討されると、疑問や指摘に対する説得力が増すのではないか。単純にお金だけの問題ではなく、このツアーによって新たに開発された教育活動やプログラムを活用するといった還元でもよい。

(知床羅臼町観光協会 池上)

実施をしていく中で、検討部会や関係者らと、この取り組みが知床にどのように生かせるのか十分議論しながら進めて行きたい。

(ウトロ地域協議会 松本)

保護と利用をつなぐ役割がエコツーリズムである。これまで不特定多数の利用に対して規制をかけていたが、ガイドの活躍も進み、利用の形態も変わってきている。従来の規制という考えだけでなく、エコツーリズムという考え方にに基づき、国立公園、世界遺産地域内外を活用しながら、よりよい利用のあり方を検討していくべきだと思う。

(小林委員)

先ほど羅臼町の田澤さんの発言にあったように、これまでのルールが金科玉条ではないというのも、ひとつの見方ではある。しかし、今日この場でこの提案に対して、イエスかノーかの結論を出さなければならないとすると、これまでの議論の経過を全く無視して、イエスという結論は出てこないだろう。

論点は動力船による上陸を認めるかどうかである。これは、これまでの「申し合わせ」の考え方、すなわち 1950 年代の舘脇先生の自然保護調査に始まり、原生自然の価値が認められ、利用と保護が並列して進められ、さらに国有林問題があって、保護に傾きながら、世界遺産の登録に至るという流れの中で、今の私たちがある。エコツアーはこの数年の動きである。現時点のベクトルのみを見るのではなくて、過去の議論の検証がないままに、今この場で「申し合わせ」を変えるのは、議論の展開として無謀であり、難しい。

それゆえ、動力船による上陸というこの一点だけは、今回の提案からむしろ後退させる形で対応策を考えていただきたい。その上でもう一度別の場で、過去の経緯を踏まえながら、将来のあり方について議論すべきだと考える。「世界自然遺産を守りつつ、なおかつ羅臼の文化遺産を継承していく」という目的の実現を優先するならば、今回は、従前の「申し合わせ」とあえてぶつかる内容は避けて考えたほうがよいのではないかと。

(座長)

上陸の問題がルールに抵触するのであれば、上陸なしのツアーは考えられるか、という意見であるが、提案者としてはどうか。

(知床羅臼町観光協会 池上)

このツアーでは番屋の中を見せたいと思っている。そのためには動力船による上陸が必要である。ただし、上陸することのみが障害となってこの提案が退けられるなら、上陸しない形も検討しなければならないだろう。しかし、もし可能であれば、動力船での上陸も含めて提案を貫きたいと考える。

(知床斜里町観光協会 上野)

議論は佳境である。小林委員の意見通り、自然保護との関わりでいろいろなことを議論してきた中で、新しい切り口が出てきた際に、会議での対処の仕方を誤らないことが大切

である。私は、何とかこの企画を成功させたいと考えている。なぜなら、この自然保護と産業との関係は、今後もずっとグローバルな意味で問われていくと思うからだ。その際には、世界遺産地域での漁業ということが大きなポイントとなってくるだろう。羅臼が培ってきた漁業という技術が、歴史的にどう評価されるかという部分も大切になってくる。そういういった大きな時間軸でもう一度皆さんで議論していただきたい。

(座長)

これは産業遺産観光でもある。非常に重要な内容なので、慎重に議論した方がいいという意見であった。

(小林委員)

この知床のエコツーリズムを考えた時に、そろそろ我々は、何を不易とし、何を流行とするかについて考えるべきタイミングに来ている。変えてしまおうとなし崩しになる部分と、一方で時代に対応していかなければならない部分との区分けを、そろそろ議論しなければならない。

先ほどの「申し合わせ」のように、その中の何を知床の価値として将来に伝えて行くのか、今回の提案はまさしくその意味で、我々に問いかけをしている。

時間をかけて議論すべき部分と、すぐにでも実行していく部分に区分けをして、まずは10でなくても、9でも8でもよいからスタートしてみるのも手だろう。

ただ、今回の狙いである教育的効果というものを、きちんとフィードバックすることが必須である。その結果、このツアーはこんな効果があるからやはり素晴らしい、だからこれまでは規制があった地域だけれども、このツアーは赤岩で実施するのがいいのだ、と地域全体が言うようになるように持っていくべきである。今はまだ、意見が対立している。ステークホルダーの意見対立があることについては保留する。しかし、提案は前に進め、将来につなげていくために、提案の一部を後退させるという必要もあると思う。

(座長)

関係者の意見対立があるということであったが、それは事実だろうか。

(知床羅臼町観光協会 池上)

そうは思っていなかった。

(小林委員)

このステークホルダーというのは、科学委員会も含めてということである。

(座長)

なるほど科学委員会のメンバーと意見が対立しているという意味か。地元では合意が取れた、ゆえに検討部会からの提案があったという認識であるが。

(知床財団 寺山)

科学委員会での指摘は、特別保護地区の核心地域として、利用のあり方を厳しく問うべきという指摘と理解している。我々地域の現場の人間としては、利用者にどう伝えるか明確である必要がある。その意味では科学委員会の意見である「核心地域だから、厳しい制限や規制のもとで利用されるべきである」という指摘はもっともであると考え。さらに長い期間にわたって運用されてきた「申し合わせ」等との整合性についても分かりやすさが必要だろう。我々は、各フィールドハウス等で「心得」等の説明を利用者にしているが、同時並行的に例外的なツアーが実施されていると、利用者の混乱を招く懸念を感じる。

その一方で、我々も部会に参加し、今回の提案を新しい試みとして実施していくことで合意している。本質的には「心得」を本格的に改定して、このような立ち位置で実施できるというステップのきっかけにするべきであると考え、今回はある程度の制限をした上でモニターツアーとして試行してもらい、その上で本格的な議論をする場を別途設定する、という方法を提案する。

(座長)

全体の大枠での議論を進めるためにも、ツアーについては制約をつけたうえで、モニターツアーとして実施する。ルール改訂などの利用全体に影響する議論については、進めながら別途検討するという体制がよいのではないか、という知床財団の提案である。これについて意見はあるか。

(小林委員)

よいと思う。モニターツアーを検証して行く中で、「申し合わせ」等についても、それを基にきちんと議論を行っていくということは、よい方法であると考え。

(釧路自然環境事務所 中島)

「申し合わせ」ができた経緯を説明したい。昭和 57 年～58 年の資料をひも解いて、これまでの経緯を調べた。「申し合わせ」が作られた当時の論点は大きく 3 つあり、①ガンコウラン等高山植物の盗掘の問題 ②ヒグマの危険性 ③ゴミの問題であった。そのような状況を踏まえ、関係機関が集まって今のような「申し合わせ」が作られた。

今後については、基本的には小林委員と寺山次長の提案に賛成である。このツアーを契機に岬への上陸が五月雨式に広がってしまうのでは、ということが懸念されているが、今回実際に事前調査に参加した上での感想として、とても興味深いツアーで、かつ教育を目的にしてもよい内容であると感じた。また、船は小型船であり、ガイド付きであることか

らも自然環境へのインパクトは小さいと考える。「申し合わせ」に関しては、今のツアーの内容のままでは教育ではないという意見もあるが、例えば今後類似のツアーが教育目的として出てきたとしても、上陸は小型船に限定すること、ガイド付きでなければ認めないこと等の、環境負荷を軽減する要件を制限にいれてもいいと思う。

(座長)

増加する懸念があることも事実であり、いろいろな制約をつけた上で、モニターツアーとして試行する余地はあるのではないか、という意見であった。

座長としては、小林委員が提案した上陸をしないという意見は、大変すっきりした解決法であると考えている。しかし、上陸をしないのであれば小型船を使う必要はなくなり、大型船による接岸ということになれば、かえって原生自然感を壊してしまうという恐れもある。そうすると、ツアーをしないということもひとつの選択肢となる。

(間野委員)

既に存在している適正化基本計画や「申し合わせ」は見直しが必要であり、それには時間が必要である。見直しは必ず必要ということであるなら、別の場を設定してでも行うこととする。今回のツアーに関しては、見直しが終わってから進めるというのではなく、それ以外のやり方を考えてみてはいかがか。

例えば、戦略の基本方針等に沿っていない利用や、自然保護上の支障が今回の利用の中にあるのか、ということをご個別に考えてみる。今回の上陸は、極めて限られた磯浜の利用であり、非常に短時間かつ少人数の滞在である。このように、何らかの形で、戦略の基本方針に反する事柄がないことを論理的にきちんと証明できるように準備してもらおう。モニタリングなどで、実証するということを組み込んだうえで、時限を区切って、小規模にまずはツアーを試行する。そのモニターツアーを1年や2年実施した上で、もし、何か問題がある場合は潔く提案を取り下げるなどの説明があるといいのではないか。

まとめると、ひとつは、方針の取り決めをきちんと全体でオーソライズするというところで、これについては時間がかかる。もうひとつは、モニターツアーについては既存の方針に抵触しない形を考え、実際にやってみたけれど、やはり抵触していないということを証明するような計画の組み立てが最低限必要である。

その上で、科学委員会からどのような反応が帰ってくるか、ということではないだろうか。

(座長)

「申し合わせ」の解釈に言及した意見があった。先ほど小林委員からも上陸に関する意見が示されたが、これらについては、専門家レベルでも解釈が様々であるのだと、座長として理解した。その上で考えると、これについてはこの場での判断はできなくなるとい

うことであり、判断を永遠にしないという選択肢しかなくなってしまうが、それは我々が選択すべき道ではない。

そこで、座長提案であるが、今回の提案については、制約のもとでモニターツアーとして実施をする。モニターツアー実施期間には、最長 3 年の制限を設け、並行してモニタリングを実施する。モニタリングの目的を達成したら一旦モニターツアーを中止し、結果について報告したうえで、その後のツアーについて再度検討する。さらに並行して、関係者間のモニタリングに関する協力体制の構築も進める。

また、「申し合わせ」と「心得」については、関係機関で連携して検討する。本件は、この検討会議の合意だけですべてを決められるとは理解していない。過去のルールや今までの経過を小林委員、環境省に一度整理をしてもらい、その上で改めて議論をする。この検討に際しては、科学委員へ科学的な助言を提供してもらえるよう、当会議より提案したい。以上を含め、実際のツアーは、3 年間以内のモニターツアーとして実施する。モニターツアーであることを明確に位置づけるため、期間中は利益の分配をせず、モニタリング費用や関連のローインパクト化等に使い、非営利で行うことを承諾いただき、検討会議の管理のもとで行う。このような条件付き承認ということで座長として提案したい。

大変歯切れの悪い承認となるが、小林委員の指摘のとおりこの場で白黒つけるというよりも、課題としてこの検討会議で責任を持って管理下に置き、モニターツアーを実施することになる。いわば、実験ツアーを進めてもらうということになる。この会議の皆が責任を持つという変則的な承認ということになるが、いかがか。

(知床財団 寺山)

管理を皆で行うとなると、管理主体が曖昧になってくるのではないかという懸念がありはしないか。今シーズン中にモニターツアーが実施されることになるが、利用者の混乱がないようにすべきである。将来的に、一生懸命に歩いてきたトレkkerがこのツアーの利用者と赤岩ですれ違っても、違和感を受けることのないツアーとなるようにすべきである。そうした視点で協力をさせていただきたい。

(座長)

皆で管理をするということは、検討会議で責任を持つということである。催行者として採算性は考えていると思うが、3 年間は、非営利で実施するというので、この条件を承諾していただけるか。事業内容とともに、経費内訳の報告をしてもらうことになるが。

(知床羅臼町観光協会 池上)

承諾する。

(座長)

非営利ということは、利益を上げてはいけないということではなく、利益の分配をしないということで、当然ながら人件費や必要経費は計上して構わない。

科学委員会との関係において、検討会議から、科学委員会に対して注文を出すということは、かつてないこととなるが、何か斜里町からコメントいただけるか。

(斜里町 岡田)

今回、当会議の枠組みでの議論に関して、科学委からいろいろな懸念が表明された。今回は、たまたま日程的に科学委員会の方が先に開催されたということも、理由のひとつだったと思われる。科学委員会と適正利用・エコツーリズム検討会議の日程の順序が逆だったらこうはならなかった。科学委員会からは、当会議の検討内容について自然科学的な視点できちんとした助言を頂く必要があり、また、各部会で必要がある場合は、科学委員会の委員に部会に参加いただくという決まりがある。しかし、それ以外の決まったプロセスがないのが現状である。科学委員会は適正利用の検討会議の親委員会である。親委員会の指摘で元に戻ってしまうのも問題があるが、手間や負担を考えながら、科学的助言をうまく取り込む仕組みを検討するべきである。

(座長)

科学委員会が親委員会であるという表現があったが、正確には科学委員会は親委員会ではなく、科学的な助言をする委員会である。この検討会議が物事を決める場であり、科学委員会は全体のことに對して科学的なアドバイスをする役割である。

科学委員会に対しては、今回のような案件に関しても科学的なアドバイスをもらえるように、打診をする。当面は、「心得」と「申し合わせ」についての検討に着手してよいかということに対して、科学的なコメントをお願いすることになる。

また、専門分野の問題であるが、愛甲委員や小林委員のような社会科学的な委員を科学委員会に参加させていただきたいというリクエストを、この検討会議からしてよいか。社会科学的な視点からのアドバイスもいただければと考えるため、これは座長の責任として提案させていただく。

少し話がそれたが、赤岩地区昆布ツアー一部会からの提案に関して、承認いただけるか。

(一同)

承認。

(羅臼町 田澤)

検討会議で責任を持って管理いただくということだが、そのためにも、科学委員会の方も含めこの会議のメンバーには、モニターツアーにぜひ参加していただきたい。私も先日の事前調査に参加したが、30年あまり羅臼町に暮らしているながら、いつもと違う視点で臨

んだためか、とても新鮮であった。

(座長)

大変重要な点である。科学委員会のメンバーも有料でいいので、早い時期に参加をしてほしい。また、文化遺産という点からも地域関係者の方に最初に利益を還元してもらいたい。そのためには、地域の住民の方の参加を強く促進してほしい。

承認は、非常に重い決断であった。決定事項の確認だが、継続審議も含めて、3年間モニターツアーを非営利で実施する、その間のモニタリングを積極的に進めるということを承認いただいた。

関連して、「申し合わせ」と「心得」の改正・修正・改善を検討する。同内容を科学委員会に対して打診をする。モニタリングについては、関係者が支援をする。また、小林委員と愛甲委員の科学委員会への参加について提案する。さらに、「申し合わせ」や過去の経緯については、小林委員と環境省で検討の上、科学委員会への提出をお願いする。解釈については、間野委員からもコメントをまとめてもらい、応援いただきたい。最後に林野庁には先ほどコメントいただいた、植生モニタリングへの協力の件、お願いしたい。

【 休憩 】

### 3. 個別部会等からの報告

(座長)

個別部会からの3件の報告について、まとめて報告をお願いします。

#### (1) 知床五湖地区における取組

(釧路自然環境事務所 松永)

資料3-1について説明。

前回の検討会議でも報告を行ったが、知床五湖の利用適正化計画、利用調整地区制度について、3年が経過したことを受け、昨年度内容等の見直しを行った。その結果、ヒグマ活動期に関して、大ループのみの利用から限定的な2ルート併用という新しい制度の運用が開始されている。今年度の利用に関しては、ヒグマ出没も例年並みで、制度の定着も確認されていることから、利用者数は前年、前々年よりも増加傾向を示している。

今年度の特筆すべき取組としては、五湖のあり方協議会でオーソライズし、知床財団主導の下「くまレク見てトクキャンペーン」というキャンペーンを行っている。植生保護期とヒグマ活動期にレクチャーを受けた利用者に、地上遊歩道の立入認定証を発行しているが、この認定証を提示することで、協賛店でサービスを受けられるという、ヒグマレクチャーに関する地域密着型の取組である。

## (2) カムイワッカ地区における取組

(釧路自然環境事務所 松永)

資料3-2について説明。

新しいマイカー規制の運用が始まって3年間が経過し、今後の規制期間の見直を検討した。今年に関しては、8月1日～25日、9月13日～22日の計35日間にシャトルバスの運用がなされる予定である。

## (3) ウトロ海域における取組

(釧路自然環境事務所 松永)

資料3-3について説明。

昨年度は、ウトロ海域における利用と保護のあり方を協議していたウトロ海域部会から、地域主導の取組を実践する「知床ウトロ海域環境保全協議会」という主体による取り組みとなった。今年度に関しても、昨年を引き続き7月22日～31日に「知床海鳥WEEK」という形で、各種イベントを実施する予定である。新たな取り組みとしては、海域観光の充実や収益の環境保全への還元、野生動物と人との適正な関係の周知、協議会の安定運営等を目的として、「知床ウトロ海のハンドブック」を発行する予定である。

(座長)

この3件に関して、質問等はあるか。

(斜里山岳会 遠山)

硫黄山登山のための道道の特例利用については、建設管理部からは、平成23年、24年、25年度に試行として実施すると聞いている。今回の資料の書き方からすると、周知期間は終わり、本格的な運用に移行するという理解をしてよいか。また、期間について、カムイワッカ部会での協議はなかったと記憶している。昨年のこの特例利用の利用者数の公式な報告もなかったと記憶しているがどうか。

(釧路自然環境事務所 松永)

硫黄山の登山利用に関する、道路使用の特例の件に関するご質問か。

(斜里山岳会 遠山)

この書き方からすれば、周知期間は終わった、つまり今後本格的な利用ができるという理解をしていいか、という質問だ。

(釧路自然環境事務所 松永)

道路管理者ではないので、厳密な言い回しの部分はわからないが、基本的には経過期間のための管理員の配置がなくなったということである。この後は、管理員を常駐させずに、道路の特例使用は継続的に行うというご意見をいただいている。今の運用の仕方が、通常運用になるのではと考えている。

カムイワッカ部会でのオーソライズに関しては、カムイワッカ部会の中で、今年度から現地管理員が常駐しないということは、道路管理者から説明があったと思う。その中で、特段の意見等はなかったことから、この形で了承されたと思っている。

昨年度の硫黄山登山口の利用者に関しては、前回の検討会議の中で昨年度の利用者の状況は報告したが、会議終了後に直接、斜里山岳会の方へお伝えしたい。

(座長)

必要な場合は、共有のために文書の作成をお願いしたい。

他になれば報告事項は終了とする。

#### 4. 将来課題に関する意見交換

##### (1) 野生生物の観光利用のあり方について

(座長)

資料4-1について説明する。

座長と、愛甲委員から提案をさせていただく。この話題については、本日何かを決定するのではなく、趣旨を説明し、皆さんからのコメントがあればいただきたいと考えている。次回以降、改めて詳しい内容をお話するが、この話題に関連し、今回の検討会議に間野委員に参加いただいている。

この話題提供の趣旨として、エコツーリズム戦略を策定する前には、野生生物と観光客の関係についてのマニュアルや野生生物見学についての方針を作りたいという意見が多かった。エコツーリズム戦略をつくることになってからは、それは戦略の中で包括的に考えるという整理となった。しかし、この1~2年ヒグマの出没が非常に多かった年もあり、ヒグマえさやり禁止キャンペーンのように具体的な対策が出てきた。その中で、もう一度その分野に関して全体で検討してもよいのではないかと提案である。以前は、まずマニュアルを作りたいという、狭い選択肢であった。今回は知床の野生生物の観光資源化について、資源化の促進という意味ではなく、資源化自体をコントロールする時期に来ていると考える。積極的に資源化するのであればその資源化のスマートなやり方を考える、資源化をしたくないのであれば共通して資源化を避ける方策をとることが、観光客という来訪者を前提とした対策としては有効であると考え。ヒグマえさやり禁止キャンペー

ンは一旦人間と動物との関係ができたあとの対策である。野生生物と観光客との関係がまだ不安定であったり、関係がまだできていないことについても、包括的に議論ができるのではと考えている。

(愛甲委員)

現状で観光資源となっているヒグマと観光客との関係について、一度きちんと現状を把握して、観光客がどういう風に知床のヒグマを見ているのかということを整理した方がよいのではないかと考えている。今週末から、庄子先生と共同で、観光客がヒグマをどのように考えているのか、どういった情報を欲しがっているのか等についての調査を実施する予定である。これは、以前ヒグマ保護管理方針を作った時に、斜里町・羅臼町の住民向けに行ったアンケートとほぼ同じ内容である。それに観光に関することを加えて実施する予定であり、この調査の結果等も今後の検討に反映させて行ければと思っている。

(間野委員)

ヒグマ保護管理方針策定の会議に参加して、その中で特に、知床は野生生物が資源であると同時に、対応の仕方を誤ると人命にかかわる諸刃の剣であるという課題があった。それをきちんと管理することが重要である。その現状について、科学者もまだ十分に分かっていない。相手は生き物で、人間の対応に対して馴化して対応を変えてくる。これはクマに限らず、全ての野生動物がそのような性質を持っている。その中で不特定多数の人に対して、どこで折り合いをつけるかは、永遠の課題である。ただ、その中でやってよいことと悪いこと、避けなければならないこと、上手にやることによってお互いに win-win になれること、お互いにそれが何なのか、それをどこまでやっていいのか等、時間をかけて議論すべきである。その中でも、喫緊の課題としてヒグマえさやり禁止キャンペーンなどは、人命に何かあってからでは遅すぎるということで、取り組みが始まっている。これを進めて行く上では、今後やはりモニタリングという部分が重要になってくると考えている。また、世界自然遺産地域の内と外での対応の違いなどが、今後大きな課題になってくる。

(座長)

皆さんからのご意見等があれば、お願いしたい。

特に無いようであれば、次回以降、将来課題とさせていただきます。

(釧路自然環境事務所 中島)

昨年度の岩尾別でクマがずっと出没していたことを受け、行政機関で密な意見交換を行った。いろいろな意見が出たが、対策に関してもすぐ取り組めるものと長期的に考えるものと、2つに分けて議論が行われた。明確な結論があるわけではないが、その間に行政や専門家からも意見をもらった。間野委員からも話を伺った。クマについての現状認識の一

つとして、1991年頃までは毎年春グマ駆除が行われていて、記録にあるだけで毎年40頭から50頭が春に捕獲されていた。記録に残っていないものも含めれば、それよりも多い数のクマが毎年春に捕獲されていたと考えられる。

その後、春グマ駆除が廃止されてしばらくしてから、有害駆除の捕獲が非常に増えている。これを単純にみると、撃たれなくなったクマが生息地の中で繁殖して個体数を増やし、よく出てくるようになったという側面と、人馴れしたクマが何度も頻繁に出没するようになったということが考えられる。正確なデータを見てはいないが、実際に対応している知床財団などによると、人馴れしたクマは、1年に満たないくらいで再度市街地に出没し、撃たれてしまっている。人馴れしたクマは市街地に再出没する可能性が高いので、そういう可能性があることを踏まえて、対応を考えて行かなければならないと考えている。

また、知床関係で、簡単なものから難しいものまで、8個のヒグマに関するルールが存在している。記載内容は重複しているものあり、ターゲットは大人から子供までさまざまであった。これらを統一した方がいいのではという提案をしたが、それぞれの理由があって作っているのだから、あえて統一する必要もないのではということになり、あえなく提案を取り下げたという経緯がある。

(座長)

今報告があった通り、ヒグマでは先行して取組等が進んでおり、ヒグマえさやり禁止キャンペーンも進められている。一般的に野生生物と知床でどのように関係を持つかということは、知床世界自然遺産、国立公園としての姿勢に関わる問題である。例えば、無差別に資源化をして、体験させていくということになれば、そういう姿勢でこの国立公園を管理して行くということにつながる。これについては、一度きちんと整理をしたいと考えている。

これについては、今日は時間がないので、ご意見等があればメール等でお知らせいただきたい。

## 5. その他（情報共有）

(座長)

それぞれ説明をお願いしたい。

### (1) 周年記念事業の概要について

資料5-1のパフレットの通り。

### (2) 周年記念シンポジウム及び関連企画について

(斜里町 高橋)

資料5-2①を説明。

知床国立公園 50 周年記念シンポジウムについて、今年実施をしたい。名称は、現時点でまだ仮称である。世界遺産にふさわしい公園利用を考えるシンポジウムを想定している。日時については、11月1日か2日のどちらかで調整中。場所は、知床自然センターのダイナビジョン館を予定している。午後からは、具体的に踏み込んだ利用のあり方考えるシンポジウム等を検討する。今後のスケジュールについては、7月中には日程を確定したいと考えている。シンポジウムについては、以上である。

(知床財団 寺山)

資料5-2②を説明。

関連して、この秋に行う社会実験について簡単に説明したい。知床自然センターのあるホロベツ地区で、公園利用等の社会実験を行うという企画である。これは本質的には 100 m<sup>2</sup>運動地公開のプログラムである。

赤岩での議論にもあったが、世界的な保護区をいかに公開し利用していくか、というテーマについての社会実験である。100 m<sup>2</sup>運動は、多くの寄付者から頂いた直接的な寄付によって成り立っており、その責任は非常に重く明確である。一方でそれを公開するという社会的意味も大きい。

実施期間は、10月14日～31日の18日間となっている。今年は10月13日に知床五湖が駐車場拡張工事のために閉園する。現在知床五湖に来訪者が集中している現状を、何かの形で解消しなければならないというテーマについてテストするためには、非常に良い時期である。五湖の閉園で行く先がない利用者を誘導したうえで、この保護区を見ていただく。このことが、公園利用としてどういう価値を生み出せるのかということを検討したい。目標として、100 m<sup>2</sup>運動公開と公園利用の可能性を検討し、最終的には大きな計画に位置付けて、先ほどもお話した知床岬までのロングトレイルの入口となる可能性も検討したい。具体的にはフレベの滝遊歩道など既存のものも含めて、未来の森ショートコース、開拓の森ロングコース等、1時間半から3時間のコースを使って、自然センターでレクチャーを受けた上で出発してもらおう。歩く際には自己責任で歩いていただくという実験である。趣旨をご理解いただき、ご協力をお願いしたい。

### (3) 地域自然資産法について

(釧路自然環境事務所 中島)

資料5-3を説明。

通称「地域自然資産法」正式名称は大変長く、「地域自然資産区域における自然環境の保全及び持続可能な利用の推進に関する法律」という。6月に議員立法で成立した。これから

環境省が中心になって基本方針をつくることになると思う。基本方針の考えをベースにして、地域で協議会を立ち上げ地域計画を作ると、その中で定めた地域について、土地所有者の了解は必要にはなるが、土地所有者でなくても、地方自治体などがお金をとって保全のための事業に使うことができるという法律である。通常は条例で対応できるものであるが、条例での位置づけを国として支援をするという形であると理解している。この点はエコツーリズム推進法の枠組みに近いと思っている。これから具体的なところが詰まってくるので、その状況を見ないと正確なところはわからないが、今のところこういった法律ができたということをご承知おきいただければと思う。

(座長)

以上の情報共有に関して、質問・意見等なければ、本日の議事をすべて終了したい。

今回の赤岩地区昆布ツアーの事業については、戦略ができたおかげで、地域のアイデアや思いを実現するために、制度や取り決めに地域で修正・変更・改善ができることが実感できる提案となった。提案者の努力と情熱に敬意を表したいと思う。

今後もさらに具体的な提案や長期の利益が得られる提案を出していただきたい。

【 閉会 】